

島根県 津和野町を訪問して

法政大学の授業を受けていく中で疑問に思うことができた。限界集落や過疎地域の勉強をしていく中でいままで知らなかった問題や社会の現状に少しずつ触れていくことができたが、それを知って私たちには何ができるのかということだ。私も含めて多くの人をもしかしたら、大学の机に座って、教授の話聞き、テスト勉強をして、それではい終りなのではないだろうか。1年生だから、まだ知識もそんなにないし自分がすることも少ないように思えるし、そもそも何をしたらいいのかが分からない。そんなときに知ったのは現代福祉学部にある国内研修制度である。自分が興味あるところを調べ、現地の人にアポイントをとり、その計画を学校側に提出すれば研修にかかる費用をすこし負担してくれる。私は自分の疑問を解決するヒントになるのではないかと思った。正直、あそこに行きたいとか興味がある場所はすぐには浮かばなかったが、どこか行って、授業ではなく自分の目で地方の現状に対して大学生ができることを知りたかったのだ。私はインターネットで「大学生 町づくり」と検索したところ、一番上に津和野と言う文字が見えた。そのサイトによると、島根県にある津和野町というところは古京都としてさかえていたが、時が経つにつれて若者は都会のほうに行き、高齢化が進み、観光客も次第に減ってしまったという。今の高齢化率は50パーセント近く、町に唯一ある津和野高校も廃校に追い込まれていた。

そんな時に、首都圏の大学生を1年間町の職員として雇って実際に町づくりに参加させたのだ。とても興味深いと思った。私ととくに年が変わってない人が町づくりに携わり、町を変えようとしているのだ。とくに面白いと思った取り組みは藩校(HAN-KOH)という町営英語塾である。先ほどの大学生の方が考えた取り組みで、教育を通して高校を魅力化して、またそこから町を盛り上げていくというものだ。教育を通して町を作るというのは自分の中では新鮮で面白いと思った。その記事を閉じた後、私は津和野町に行こうと決めた。

東京に津和野の事務所があり、そこを通して現地の人と連絡をとることができ、2月の半ばに2泊3日の予定で飛行機にのり島根へと向かった。空港の最寄り駅から津和野町に行くときにまず驚いたことがある。電車が2時間に1本なのだ。私の中では電車は最低でも30分に1本は通っていると思っていたので何気ないことだけど都会と田舎の差を感じてしまった。正直なところ、わざわざこんな交通の便が悪いのでは人が減ってしまうのも無理はないとも思った。田舎とはなんなのか、そんなことも思いながら研修が少し不安になった。津和野駅に着いたときにまず最初に、暗い！！と思った。外灯がほとんどなく足元がよくふらついた。暗さのせいなのかほとんど人は歩いておらず物静かで都会の夜とはまったく違うと実感できた。自分のあたりまえはこのあたりまえではないのかもしれない。

その後、現地のコーディネーターと合うために津和野駅から津和野高校の藩校というところに向かったのだが、途中で1人のおばあさんとすれ違った。そのときに「こんばんは」と声をかけられたのだが、そんなことがなぜかとても印象に残っている。都会を歩いていて挨拶をされることはあるだろうか。

藩校につき、現地のコーディネーターの方と出会ってお話をして、そこに通っている生徒たちともお話をすることができた。藩校は津和野高校のすぐ横に位置しており学校の寮に住んでいる子供が通っている。授業内容はさまざまだが、勉強というよりも生徒を1人の生徒として見守るということを大事としていた。印象に残っているのは、女の子と話しているときに「この学校のいいところは何？」と聞いたところ、「みんなが仲いい」と答えてくれた。藩校は一つの学校を盛り上げるものでもあるが、塾という感じよりは、みんなの家という感じであり、学校、塾、町全体でそこに通う子供を見守っている感じが感じられた。二日目、午前中はコーディネーターの方と一緒に町内を回り、町を盛り上げるために活動している人や、町のことを思っている人のもとを案内してもらい、お話を伺った。私は驚いた。会った一人ひとりが町についての思いを持っているのだ。もっとこうしたいとか、もっとほかの県の人に町を知ってもらうにはどうしたらいいか考えている人、こういう人たちはなかなか都会にはいないと思う。さらに思うだけではなくそれを町に住んでいる人自身や、ほかの人と協力して行動に移しているのだ。たとえば、ある人は津和野に観光に来た人が実際に観光するにあたってより楽しんでもらうためにマップをつくった。マップには種類があり、人とであうマップ、観光場所を紹介するマップ、英語でかかれたマップなどいろんな人にあわせて工夫されていた。ある人はTEDで話していた人の話に感銘をうけて、この話を町の子供や大人のかたに直接聞かせたい遠見、町を回ってお金をつどって講演会を開いた。ある人はもっと町が盛り上がらないかと考え、地元の方や観光に来た人が気軽に集まれるような食堂を開いた。このようにいろんな人が思いをもって過ごしているのだ。午後はコーディネーターの方のお話と津和野高校にあるグローバルラボという部活動を見学させていただいた。コーディネーターの方がなにを学校でしているか、今後何をするのかなどを聞くことができた。印象にのこっているのは町を盛り上げることの難しさだ。地域を盛り上げることはまずは地域に住んでいる人の理解が必要だし、あたらしい事業を始めるには多くの人に考えを知ってもらうことがある。また一人が町を盛り上げようと頑張ったところでほとんど変わるものはない。町をつくるのはそこに住む住民なのだ。グローバルラボとは子供たちが子供たち自身で町を盛り上げるにはどうすればいいか考え行動していく部活動である。実際に私も竹が生えている土地を活用するために子供たちと竹を切りに行った。この取り組みは大人たちにも多くの影響を与えているのではないかと思った。子供たちが待ちのことを考え行動していたら、私たち大人はなにをやっているんだと思うのではないだろうか。子供が行動するという事は、大人が言葉で呼びかけるよりもきっと威力絶大だし、小さいころから町のために私たちにできることはなにか、私たちにしかできないことはなにか探すことはいい経験になるに違いない。

私は今回の津和野の国内研修で強く思ったことは、田舎は都会より寂しくないということだ。私は、都会は人がたくさんいて、近くに大型スーパーがあつたりして田舎よりにぎやかだと思っていたが、実際は隣に誰が住んでいるかも良くわかっていないし、町をどうしたい

かなんて考えたこともなかったし、町をあるいていて挨拶なんてされた記憶があんまりない。人と人の距離が近いようでとても遠いのだ。津和野はたしかに電車も少ないし、夜は暗いし、人口が年々減ってしまっているのも事実である。それでも挨拶してくれる人、町のことを強く考えている人、町のために行動する子供たちなど人が町を考え作り上げている。人と人の距離が近いのだ。最後にコーディネーターの方は言っていたが、もちろん私たちは知識がないし、できることはそんなにもないかもしれない。でもそれで行動しないのではなくまずは触れてみることに、テキストの外を自分の目でみてみることに、現地の人と話してみることに、自分に関係ない世界だと思っていたものをすぐ身近なものにすること、大げさかもしれないがみんながそんな風にできたら変わるものがあることは間違いない。もう私にとって津和野、そして田舎はすぐそこにある身近なものだ。